

今月の注目の3冊

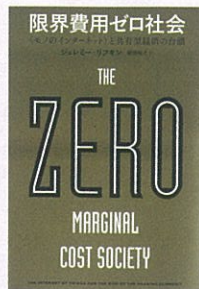


学校蔵の特別授業

— 佐渡から考える島国ニッポンの未来

尾畑留美子(著)
日経BP社
本体1,600円+税

「日本で一番夕日が見える小学校」を舞台に地域のあり方を考えた書籍。その西三川小学校は、2010年に廃校となったが、著者である「真野鶴」五代目蔵元が中心となり、2014年に酒造りの場、酒造りを学ぶ場、交流の場、そして環境の場として活用する「学校蔵」としてよみがえった。島内外の人が学校蔵の教室に集まって、「佐渡から島国ニッポンの未来を考える」というワークショップを開催。その講義の内容をまとめた。

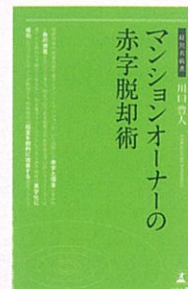


限界費用ゼロ社会

— <モノのインターネット>と共有型経済の台頭

ジェレミー・リフキン(著)
柴田裕之(翻訳)
NHK出版
本体2,400円+税

資本主義からシェアリング・エコノミー（共有型経済）へ変わりつつある。IoT（モノのインターネット）が原動力となり、経済パラダイムの大転換が進行している。IoTにより、モノやサービスを1つ追加で生み出すコスト（限界費用）は限りなくゼロに近づき、将来モノやサービスは無料になり、企業の利益は消失して、資本主義は衰退を免れないという。21世紀に実現する社会と経済の潮流がわかる一冊。



マンションオーナーの赤字脱却術

川口豊人(著)
幻冬舎
本体800円+税

東京都内で賃貸物件の空室率は12%以上と高い傾向になり、家賃水準は2000年以降下がる一方だ。赤字に陥り、運用に苦しむアパート・マンションオーナーは多い。祖父から赤字状態の物件を受け継いだ著者は、2000万円の赤字物件を2年で黒字化した実績を持つ。その成功事例をもとに、不動産のノウハウをまとめた一冊。国内に相次ぐ「賃貸物件の供給過多」という社会問題に対峙する考え方とビジネスのヒントが得られる。

名著

クリエイティブ・マインドセット

人口減少やグローバル化、情報化に伴って外部環境は著しく変化し、人工知能などの技術進化も進んでいる。「新しいことに挑戦する力」は今まで以上に求められており、事業構想家にとっても、「創造性」は核となる力である。ビジネスの世界に「創造性」という概念を取り戻した立役者が、IDEOとスタンフォード大学d.schoolの生みの親であるケリー兄弟である。

人間が本来持っている創造性に気づき、日常にイノベーションを取り戻すことが彼らの願いである。そのメッセージはシンプルである。しなやかに失敗を恐れず、創造性に自信を持つこと。そのために生み出されたデザイン思考は、イノベーションのための万能な方法論としてよりも、皆が持つべき心構えとして読まれるべきではないだろうか。



クリエイティブ・マインドセット

— 想像力・好奇心・勇気が目覚める
驚異の思考法

デイヴィッド・ケリー(著)、トム・ケリー(著)
千葉 敏生(翻訳)
日経BP社
本体1,900円+税